

報



會

會 岳 山 本 日

46

月 五 年 十 和 昭

山民の言葉から

高橋 文 太 郎

もうこの一部は引用されて居るかも知れないが、W・A・B・クリッヂはその著で次のやうなことを述べて居る。人々の談話や地圖の上に出て来る山の名前と云ふものは、その峯が嘗て登られたことの證據にはならない。その山の下方から峯を仰いだだけで、人々は今迄それに名前を付けたからである。處が山と違つて、峠や乗越になると、それが實際に人々に依つて踏み越えられた後でない」と命名されないものであつたと云ひ、

又、山の峯は自然に依つて創造されたものであるが、山の峠は人がそこを踏み占めて始めて峠となつたのである。云ひ換へれば、峯は自然の現象であり、然るに峠は人がそこを横切るまで所謂峠とにならないのである。とは云へ、明らに尾根の凹みは亦自然の表徴に他ならないのであるが、そこで人々は特殊な動機がないと高山岳へは登らないのであつたが、實用的理由のためにはどしどしと樂な氷河の峠をも超えて居たのである。だから、峠は峯が登られる以前に既に人々が横切つたと云ふのは疑ひの無いことである。そして實際的な目的のために土地の人々は以前から峠を超えて居たが、その巒谷の峯を登らうとしたのは他からの旅行者がその谷へ這入り込んで來た後

のことであつた。従つて、時の順序を逐つて先づ吾々はアルプスに於る氷河の峠についての報告と共に、高山岳探検の歴史を調べて行かねばならないが、峯に關する知識よりも峠についての知識を獲ていくのは遙かに六つかしい事である。然も地圖に於ける氷河の峠や道路の表示などは既に誰かがそこを超えて行つたことを充分表はして居るのは言ふ迄もない。

この様なクリッヂの記述では、アルプスに於る峯と峠の差異の問題と、もう一つは之等のものに就て其の土地の人々の命名に關すること迄も考へて居るのが窺はれる。極く初期のアルプスの峠は多く巡禮者に依つても超えられた事が見えて居る。始めて超えた宗教者の名前がその峠に附與されたり、土地の人々が、信仰の對象としてその峠に安置した立像などからも峠名の出たことが記されてゐる。多くは又そこを超えた瑞西のトボグラファアーなどに依つても命名されたのである。わが國のお助小屋に略々相當するかと思はれるホスピスなど云ふ小屋も建てられた。次に山名の方を云ふならば、矢張りわが國に似通つた命名心理が見られぬことも無いやうだ。峠と異つて峯への命名はその峯が必らずしも人間に依つて登られ、或はその命名の時以前に登られてあつた事に基因しては居らぬと云ふクリッヂのセオリイは、何處まで普遍性があるかは考へる餘地もあらうと思はれるが、Monte Visoと呼ぶ山の姿はそれを取り巻く下方の土民たちの注意を喚起した最初のもので Piedmont の平原からその山は大變極立つて見えるものだつたと云ふ。これは亦當時の好事家的な文筆家の間では Vesulus といふ名のもとに色々と言はれた。ピラト傳說で有名なルツェルンの the Pilatus と云ふ山の名前にも説がある。その物語に出てくるユダヤの古代總督の名前に關係すると云ひ或はその頂の廻りに雲が集まること即ち *pileatus* と云ふ言葉から來てゐるとも云はれた。モン・ブランの山名田來について記して見ると、シャモニイに於る一〇九一年頃のベネディクト教團の修院建立の書類中に語られてゐる *white rock(rupes alba)* と云ふ名前は *Mont Blanc* を指してゐるのだと云ふ意見を持つものがある。或るものは、その名稱は *Roche Blanche* を示して居るのだと考へるが、又、一六〇六年から十七世紀の地圖や人の話の中では *Montagne Maudite* と云ふ名で表示され吾々に親しみ深い *Mont Blanc* といふ呼名は恐らく地方語であらうが *Pierre Martel* の文書に出てゐる一七四二年とその文書の英譯に附せられた地圖に見える一七四四年より以前には見

出すことが出来なかつたと云ふ。モン・ブランの初登頂は一七八六年にジェー・バルマツトに依つて行はれたと登山史上ではなつて居るので、それ以前は明らかにこの山も下方から仰がれた「白い岩」の山であつたかも知れない。クリッヂの一書を續いただけでは何共はつきりと言ひ兼ねるが、古地圖とか古文書などからの資料を大いに用ひて——或は之等は他の書からの孫引か知れないが——そして尠く共、山名などの由來が説かれて居る。それと共に山名や峠名の生れて來た經過とか命名の裏に動いた人々の心理が窺はれるのである。

自分にとつて然し乍ら恐らく他の多くの人々にとつても、峠を超えと云ふものは、峯への登行よりもつと多くのロマンス的な要素を持つてゐるのだと云つたのはマアティン・コンウェイであるが、之からわが國のものに就いて少し許り述べて見たいわが國でも峠が色々な意味で人生との交渉を持つて來たのは云ふ迄もない。峠が信仰の對象として人々の心に生きて來たのは古いことで、峠超えの人々がこの頂で小柴を折つて神に祈つた風習のある處は、花折峠などの名前を持ち、最近聴いたのであるが朝日山麓三面村の人たちは初めて自分の村の見える乗越をコゴエトと呼び、又その附近にはヌサタテと云ふ峠の場所があるさうである。斯う呼ぶ峠の上は矢張り何か信仰の場

所で、村の人達の日頃敬信する山の姿がまともに望まれるところだと云ふ。

岩手縣の澤内村の人たちは側稜間の縦谷を登り詰めた頂をヒラキと呼んでゐたが、之などは實際にその澤を登り詰めて頂へ着いて見ないと恐らくこの方言の感じは味へないのだと思つた。又この邊では山頂を多くはテッペコと云ふが、秋田縣の一部でも矢張りテッペ又はテンペコ、尾根の凹みはダルミと云ひ、峠の頂を特にコエドと呼んでゐる。この最後の二つの相違は確かに微妙な感じの對立で、遠くから見ると、現實にそこを超えて行く者の心に感じられる違ひであらうか。爰に至つて地方語の世界はその故郷のやうに懐しい青森縣の階上岳は地圖の上では階上と種市の二つの名前だけしか讀めないが、それを仰ぐ村々の人々によつて異名を持つて居る。鳥屋部岳と呼ぶ人々も多い。信仰の關係があるのである。吾々に親しみ深い尾瀬の燧岳は別に土地の者に依つてイハキと呼ばれて居るが、之に就いての説明は爰には省くことにしよう。それから山の奥を指す語に山のカツツ(陸中)、澤の上流を云ふ語に澤ガツツ(同上)、矢張り河の上流地をカツツ(ツ)、河内の云、萬葉にカツツ(遠野方言誌)、澤頭に續く頂をカツツ(津輕、澤の詰りをカツツ(陸奥)、尾瀬只見川地方で高地(澤の頭の事、針葉樹)、澤の上流地をカマテ(越中、

山人夫)、澤のカミ(飛彈、山人夫)などがある。穂高山麓の上高地(神河内)は最近色々とその名稱に宛てる文字の點で問題になつた様である。要はその宛字よりも讀方の點にあると思ふが、今となつては讀方も固定してしまつて居る。或は峠の頂から初めて穂高山の山々を望んだ當時の人々や澤を登り詰めて該地へ漸く辿り着いた當時の人々の氣持も顧みる必要はあらう。そして近世の神祕主義に陥る前に先づ山民の言葉に耳を傾けて見たいと思ふ。併し私は上記の地方語の資料だけから、上高地のやうな山岳家の聖地を彼此こゝで解剖することの無様は一先づ控へて置かう。(昭十、五)

東北の山

藤島 敏男

どこから北と、はつきりはいへないが、東北——東北地方——とよばれる地域には、なにかしら寒むさむとした暗いやうな、湿つぽいやうなまだ開られてゐない大袈裟にいへば pays incognu といった感じがともなつてゐるやうに思ふ。私達のちいさい頃に、東北の凶作飢饉或は洪水氾濫といふやうにこの地方の蒙つた自然の災禍のかず／＼をいくたびかきかされたその淡い記憶がいつまでもこのこつてゐるからであらう。また本土の内でも北に寄つてゐるこの地方——東北といつてもまつたく

私達には東といふ觀念よりも北といふ方がづつとよく響く——が交通の便も少く、文化的にも、經濟的にも恵まれないで、他の地方に比べて最も發達のおくれてきたことも、さうした考へをもたせるひとつの因をなしてゐるのであらう。東北に對するこの先入主的な考へは私が山にのぼりはじめて、あちこちの地圖を買ひあつめる時分から今日にいたるまで尙ほ私の心のうちにふかく刻まれて消え去らないものである。

したがつて、暇にまかせて山に登り歩いた時代にも、東北の山へはほとんど足をふみ入れたことがなかつた。それはいま言つたやうな東北そのものに對する感じがその地方の山岳に登るのを臆却がらせたからでもあるし、また當時は私の興味をひく山がほかにあつたからでもある。しかし中部地方の山々にひととほり馴れてしまふと、いつか私の心は東北の山にひかれるやうになつた、もとより本州中部の山に於て私の足跡はいくらもなく限られてはゐるが、それらの山々にしたしく登つても、或ひはまたこれを遙かなる彼方に眺めやつても、未知なる山々から享けるやうなものは私の胸に響いてこない、山頂に立つてもそれらはすでにいくたびか遠くから近くから望み眺めたことのあるものが多い、打ちよせる波のやうに幾重にも重なり連なる山坂をのぞみても、はじめて相見る山をそのうちにみいだすやうな

ことは殆んどなく、むしろ過去に山頂を踏んだ山のひとつふたつを必ず指示することの出来るやうな場合がすくなくない。

つまりひろい意味での本州中部——武甲駿信越上野——の山岳は、これらの山々に對するとき、或ひはまたこれらの山々に想ひを馳せるとき私にとつて疎密の差はあるにしてもつねに或る親しい心やすきを感ぜしめる。その親しみ、心やすきが、私をしてしば／＼氣輕るに山登りをさせるのであつた。そうして出掛けたばに私はなにか異つた新しいものをそれらの山々から享けてかへつてきた。季節、季節によつて、またおなじ季節でも登る日の晴曇によつて、或ひはそのときどきの仲間によつて、山の私に齎らすものはかぎりなく變つてゆく。親しさの増すにともなつて、私はますますそれらの山々に惹きつけられていつた。けれども不圖どうかしたはづみに、どんな山貌をしてゐるのかみたこともないやうな山に登つてみたい、といふやうな希望が私の心胸の片隅にうごいてゐるのを感じるものがあつた。おそらく、山にのぼるもの誰かが抱いてゐるに違ひない、未知への憶がれである。私は東北の山にのぼることを考へた。

東北の山は、ずつと以前北海道旅行の歸途十和田湖を東から西へ抜けただけで五色温泉まで、滑りに行つたことはあつても、それ以北に足を伸ばさなかつた私には、たしかに未知の境地であつた。しかし、これは私自身にとつて特にさうであつたので、東北の地に育ち住む人々、或はまたこの地方に於て學校生活を送つた人々などは、恐らく或る親しみを以てその地方の山々を考へ得るのであらう。このことは東北地方に限らない、日本のやうに國土が非常に細長く伸びてゐるところでは、山に登る人々の多くが或る地方の山に就て多少なりともかういつたやうな想ひを抱くことがあるだらうと思ふ。

東北の山に登らうと思ひ立つた私はまづ登るに先立つて山を眺める様な旅をしてみやうと考へ、旅の時節を、山谷を彩る色のもつとも豊富な秋に選んだ。由來東北の秋は自然の姿のいづれ美しい季節だとされてゐるし、また東北に對して私のもつてゐた氣持からしても、色彩は絢爛をきはめてゐながら、その裡にやがて来るべき冷かな冬を豫感せずにおかない秋が、さういつた旅にふさはしいやうにおもはれたのだ。

或る年の十一月、私はひとり東北への旅に出た。磐梯の裾を通つて土湯峠を福島の方へ、峨々温泉から刈田峠を上ノ山温泉へ、ずつと北へ寄つて仙岩峠を生保内から盛岡の方へ越した。車窓から、峠の上から、見知らぬ東北の山を眺めて近付きにならうと思つたのだが、遠山の望み見られるやうな秋晴れの日はほとんどなく、鉛色の陰鬱な空が重苦しく蔽

ひかぶさつて、つめたい曇まじりの
米雨を降らせたり、はげしい風が雪
を含んでやつてくるやうな日が多か
つた。

流石は北國、十一月の始めだとい
ふのに、高距八百米に足りない仙岩
峠さへも、尺餘の雪に路は埋れてゐ
た。そんなふうだから少し高い山は
もうすつかり冬化粧。旬日の旅のあ
いだに僅かに望み得た鳥海山も胸ケ
岳も岩手山も文字通り眞白になつて
そこに感じられるものは秋といふよ
りも寧ろ冬の姿であつたが、山の中
腹以下には、絢爛を謳はれる東北の
秋が名残りの美しさを惜しげもなく
まだ擡げてゐた。東北の秋は、たし
かに讃へられるだけの美しさをもち
てゐる。それは夏から秋、秋から冬
への變移が少くとも本州中部の地方
に比べて早い、つまり秋の短かいとい
ふことにも因るやうである。これ
は、この山旅のときにはそんなにも
感じなかつたが、この地方に私が住
むやうになつて、手近かな山を歩い
てみて、はつきりと感じたことであ
る。それから東北の山地は概して針
葉樹林が少い、勿論吾妻連峯や蔵王
連山のやうにふかぶかと茂つた針葉
樹林をもつ山もあるが、づつと北へ
寄つて八幡平や八甲田の方へいつて
誰にもわかるアホモリトドマツの大
きな嶺がりの見出される外は、秩父
や白峯、赤石山脈などにあるやうな
黒木の森林は殆んど見られない。地
質、氣候、山の高さなどが植物の分

布を左右するのであらうが。素人の
私にはこんなことは全く分らない。
たゞ實際東北の山を歩いて、潤葉樹
殊に栂の見事な原生林の多いのに氣
付いたのである。このことも東北の
秋の美しいと言はれるひとつの因を
なしてゐるやうに思ふ。

どの山も概して峻しきといふやう
なものを持つてゐない、といふより
も寧ろそれに缺けてゐるといつた方
が當つてゐる東北の山、中部の山と
は比べものにならないほど今は登山
者が少いにも拘らず、ふるくから踏
み拓られた極はめて自然な登り道
をもつてゐる東北の山を登つたり越
えたりするのには秋が最もふさはし
い季節であるに違ひないが、たゞ何
よりも困るのは天候の悪いことと
ある。日本海岸寄りの方は十月の始
めから三月の終はりまで約半年のあ
いだ、青空のみえる日は數へるほど
しかない。秋田洞候所の報告によれ
ば一年を通じて快晴の日は二十日を
出ないといふのだから、氣象學上の
快晴でない日を加へても、所謂晴天
と言へるやうな日が少くないことは
想像以上であつて、殊にそれが秋か
ら冬にかけて甚だしい。

ひややかな秋の雨に濡れて、峠路
や山路を歩くに倦しい旅の日が、決し
てむげに厭ふべきではなく、時とし
ては秋といふ季節の素莫とした味は
ひを氣を散らすことなくしみじみと
考へさせて呉れるに役立つものであ
るとしても、雨の日に次ぐに雨の日

を以つてするといふやうな天候は、
なんとしても、山を目指す者に面白
からう筈はない。だが、東北地方の
秋ではそれが常態なのだ。日陰はす
こし肌寒むく、日向は春の懐いやう
な暖かきとは異なる爽やかな温かき
をもつてゐる小春日和、そんな日和
が、ほとんど望めないとすれば、い
くら霜葉の美しさがあつても、秋の
山旅の楽しさはその大半を奪はれて
しまふ。東北の秋をたづねての獨り
旅から受けた私の印象はこのやうな
ものであつた。

概してなだらかな傾斜をもち、葉
落ちてのちは明るい林相を呈する潤
葉樹林にその大部分をおほはれ信越
地方のやうに一時に多量の降雪を齎
らされることなく、しかも豊富な降
雪量に恵まれ、春期おそくまで充分
な残雪を抱く、東北の山を訪れるに
は、三月、四月、あるひは五月、氣
候の遅れてゐる北國の天地にも、ど
ことなく漂ふ春の氣配を身に感じな
がら重苦しい冬籠りから、開放され
た喜びを、山の麓に住む人達と共に
頷き享け入れながら、夏の終はり秋
の初めと同じほどまでに永くなつた
日脚に、時間を氣にする必要もなく
氣隨氣儘に、締つた春雪の上にサラ
リと降つた新雪の中を、また或る時
はザラメ雪の上を、朗らかな心で滑
り歩けるこの季節が最も適してゐる
であらう。

白木山に登る

參考地圖陸奥市海田町市可部

吉澤 一郎

廣島縣で一番高い山と云へば鳥根
縣美濃郡(石見)と本縣山縣郡に跨る
恐羅漢山である。海拔一三四六米突
關東人には大して高いとも思へまい
然し此の山は谷一つ距てた南の十方
山(一三一九米突)と共に冬期は兎も
角雪のない時分には頗る手強い山で
あるらしい。此の二つを掛けて登山
するとなると少くとも四五日の暇が
要るので務め人である私には少々無
理である。行き度い事は山々である
が遂ひ行く機會がなくて近所の手頃
のもので間に合せて居る譯だ。

所で表題にある白木山(八九〇米
突)といふのは廣島市を流れる太田
川の支流三篠川の右岸にある川で廣
島近郊のものとしては一番高い部類
に這入ると思ふ。

秋薺れの或る一日リユクサツク
を肩にして私は一人藝備鐵道に身を
托し廣島驛から一時間許りの所にあ
る志和口といふ小驛に車をすてた。
登山姿の人々には餘り見慣れない田
舎の人達は異様な眼を以て私を見送
つてゐた。附近の山々は丁度朝の霧
に深くとざされてその頭を見せず、
秋とは云へ已に紅葉してゐる此の谷
間の風は淋しい冷やかさを身内に感
じさせた。一寸した峠を越へて白木
山の頂上附近から流れ出てゐる川戸

川の畔に立つた、此の峠を小學校の
生徒が五、六人づつ一かたまりにな
つて越へて行く。「行つてお歸り」と
いふ挨拶も面白い。朝の陽に霧もそ
ろ／＼退散して呉れる。田の中に立
つて働いてゐるお百姓さん達も妙な
氣に見送つてゐた。稻も大半は刈り
取られて人々は牛や馬を使つて次の
收穫の爲めに黒い土を堀り返してゐ
た。道端の柿の木にも赤い實が已に
残り少くなつてゐる。弓投、正木、
大槌の小部落を過ぎるともう人家は
終りとなつて後は山と川と私だけの
世界だ。霧も最早消え失せて遠い山
々の頭が段々に出て来る。多摩川や
秋川の上流を歩いてゐるのだつたら
その一つ一つに懐しい思ひ出がある
のだが怎んな遠くの山々には全く縁
のない私であつた。谷の奥で會つた
見知らぬ人に今一度登りの道を確め
るとその人は私を警林署のお役人と
でも思つたのか馬鹿に丁寧な帽子を
とつて親切に白木山への登路を教へ
て呉れた。それからはいくくの一人ぼ
つちになつて了つた。

南北に向つてゐた谷が西南に折れ
曲つて行くとき三篠川の本流と此の谷
との間に白木の山頂から派出されて
ゐる枝根根の山稜線に向つて緩い傾
斜の廣い斜面が現はれた、對岸には
近頃造られたと覺しき山道がヂグザ
グに斜面を這つて低い山の脊を可部
の奥の根谷川の上流へと越へてゐる
此の山道の傍に時折雜木に被はれた

中に朽ちた昔の材木運搬の橋が覗いてゐた。もう二十年も三十年も昔になるのだらう、秩父の雁峠からあの暗い葡萄酒に降りて行く道にも恁んなのが幾つもあつた事を憶ひ出した。いゝ加減の距離の所に破れ小屋が残りの周囲に鋸屑が未だにうづ高く積まれてゐた。小屋の中へ這つて見ると布團に使つたものらしい黒ずんだ綿が棄てられてゐた。十年前の奥秩父にはよく恁んな小屋があつた、秩父の好きな友人と二人よくこんな小屋の片隅に羽目に床板を立かけたりして一夜を明かした事もあつた。鎌の様に研ぎすまされた月を屋根の隙間から寝乍ら眺めたのは丁度今頃の雁坂峠の思ひ出ではなかつたらうか。

二、三度小屋の所で道がとぎれて了つたがその度に見當をつけて藪潜りをし本道らしい所へ出る。川の源頭に近づくに従つて勾配は急に増して来た。白木の山頂からは可なり廣い防火線が瞭りつけられてゐる。東と南の山々が次々に面白い様に頭を出して来る。一人歩きの氣安さには思ふが儘に腰を下ろして附近の景色に眼をやる事が出来る。高尾嶺の裏山の様子と良く似てゐる。

暫くして漸く白木山頂から東北へ走る山稜に出る。今度は防火線に沿つて左へ登る譯だが丈の高い薄が白い穂を兩側からなびかせて静かな微風にゆれてゐる。鹽山方面からの大菩薩峠を思ひ出す、實際こゝいふ山

を歩いてゐると東京の近郊から遠く奥秩父へ續く山々への幾つかの旅が連想されて来るものだ。道は一つの峯のすぐ下を横にまき川戸川の源頭をぐつと廻る、横道を小径の中へ這入つて高い所へ出た。此處が白木の山頂であつた。志和口の驛から三時間と十五分。木の一本もない裸の山頂である。二等三角點の標石が一つポツンとして首を出してゐる。何かのお宮さんが南を向いて三角點の直ぐ下に立つてゐた。眺望は實にいい。三角點の上に地圖を置いて周囲の山々を眺め廻す。大山は見えなかつた様だが眞北より一寸東へ外れて三瓶山が右に子峯を持つた姿、多分七合目位から上と思はれる部分を打續く山波の彼方に現はしてゐた。

嘗遊の奥差々宇山の山塊が地圖の感じよりは遠く温泉の谷の左手に長く連亘してゐる。その先の方に廣島灣が霞んでゐた。西から北へかけては準平原の跡と謂はれてゐるだけであつて山の高さに遠目では大した高低はなく縣最高の恐羅漢もそれと瞭りアイデンティファイする事が出来なかつた。可部の町はと敵ると阿生山の右を太田川の本流が折れ曲る右手の所に細長く延びてゐた。白木山塊の南側は急激に三條川に陥ちてゐる、此の山塊は斷層によつて成つた一つのブロックなのかも知れない。地圖によると白木山頂から北に直徑約二里根谷川が「型に曲つてゐる所がある。そして對岸が百米突の急

崖になりその向ふは北流する川の源頭になつてゐる。此の地形を観察し度かつたのであるが残念な事に山裾の影になつて見えなかつた。

山上には御陽様と自分一人なのを見極めてから素裸になつて汗を拭つた序に山頂に穴を掘つてオットメをやる。人でも登つて来た穴へでも這らなければならぬ所だが差詰め今やつた穴ぢや御免だ。誰も來なかつたので干ひたものと取かへてすつかり身仕事を済ませ正午下山にかゝる頂上附近の開豁なのに比して之から下の村まで出る間眺望の利く所は一、二ヶ所しかなかつた。國師から甲武信へ行く山嶺の道を想像すれば大略見當がつくと思ふ。登り下りの大してないのと兩側の見晴しが利かぬ爲めに地圖上の何處を歩いてゐるのかさづかり見當がつかない。頂上から三十分位來た時、丁度地圖に三郎別當と書いてある附近であらうと思ふ、薄暗い山嶺道路の上に「死ぬのは早い、一寸待て」と書いた棒杭が立つてゐた。恁んな所へ來て死ぬ奴がよくあるのだらう、然し眞實間だからいゝ様なものゝ之が夕方にでもなつて薄暗い闇がそろ／＼這ひ登つて來る頃であつたら一寸氣持ちの悪い場所になるかも知れない。それから十五分道が急に右へ曲つて降つて行く、之が白木の山塊として廣島から、一番高く見える所なのであらう、鞍部につくと十字路になつてゐる。左へ下れば素直に中深川の驛に

出られると思つたが地圖にあるも一つ西の尾根道を辿る事にしてそのまゝ急に細くなつた殆ど踏跡といつていゝ位の小道を藪に突つつかれ乍ら登つて行つた。一時五分地圖に岩の記號のある一帯に出る。此處から眞南に道がある譯なのだが殆どそれらしいものもない。然しガムシヤラに藪の中に突入して道の痕跡を求めた

ある事はある。昔の經驗を應用して怎うやら地圖通りに下つて行く、時々藪の中から遙か南に當つて廣島の市街が霞んで見える。暫く下ると次第に道らしくなつて來た。鬼ヶ城山の天狗岩が見上げる様に高く半ば紅葉した山側に突立つてゐるのを見る頃、三三米突の獨立標高點附近で道が二岐してゐた。私は之を右にとつて丁度谷川岳から水上温泉へ降る様な急な尾根道をぐん／＼降りて行つた。山の下の院内といふ部落に出たのは正二時だつた。道をたづねた中年の男が何處から來なかつたといふから、白木からあの尾根道を下りて來たといふと、たつた一人でもよくまああんな所を降りられたものだと思ひ感心してゐた。田舎の人達は都會の山好きの人間を少し甘く見過ぎる傾向がある。之は何處へ行つてもよく經驗される事だ。

中深川の驛へ着いたがガソリンカーは今出た許り、あと一時間半も待たねば來ぬといふので重たい足を引摺り乍ら又ぞろ一里の道を三條川に沿ひつゝ可部電鐵の中島驛へと歩いて行つた。腿のつけ根が痛みだしたいつかトシちゃん金剛葛城へ行つた時にも恁んな事があつたがトレイニングの不足は實にきき面だ。水の綺麗な三條川之は廣島の多摩川なのだ、水源地になつてゐるのだから足の方か痛むので景色なんか眼に這入らない。深川橋によつて三條川の對岸に渡り、根ノ谷川橋によつて中原村に入り、中島驛に着いたのは二時五十五分、可部町の東北にある高松山の小山がこんもりと松をかぶつて眞北に見える、此處から眺めると白木山塊の山側の急傾斜な事が一層よく解る。くたびれはしたが、そして足まで痛めはしたが秋の山の一人歩きもいゝものだと思ひ一人で感心し乍ら上りの電車を薄きたないベンチに腰を下ろして待つて居た。

尙廣島縣のスキー場に就ての知識は此の冬に相當得られると思ふからいづれ後の機會に御報告しやう。關東人の考へる程つまらぬ所ではないらしい。

佐伯宗作の遺難

芦崎の佐伯宗作は立山地獄谷に於て雪穴に充満せる亞硫酸ガスの爲窒息遂に薨生するを得なかつた山である。大正十二年三月今は劍澤に永眠されし窪田他吉郎氏が針の木峠を越えたことがあつた。此時の案内人として選れた無名の青年こそかれ宗作であつた。以來十餘年數々の功績を残したことは今更こゝに記すに及ぶまい。彼の死を晩雪の一悲劇として葬るにはあまりにも惜しいと思ふ。

山岳圖書展覽會の記

島田 巽

小山内薫氏が非常に好んだと云ふ店を仕舞つた後の丸善——いくつも屍が白布に覆はれて並んで居ると云つた感じのする、カバリーをかけられて書籍の列だけが人氣のない薄暗の中に動かないで居る。それは何とも云へない一種風變りな雰囲気だが、五月二日の晩だけは、その墓地のやうな静寂さも、完全にかき亂されて睡眠不足のシエクスピアだのゲーテだの以下諸々の書籍の靈はさぞかしJ・A・Cのこの催しを恨んだことだらう。

それ程展覽會前夜、陳列の仕事は賑やかだつた、もつともこの日に到る迄約一ヶ月間の松方さん以下理事諸公の不眠不休の忙しさは並大抵のことではなかつたらうが。

和書三十三冊、洋書百八十二冊、其他地圖、遺稿類が全部並べられて陳列を待つて居る。平素、秘藏されて居る書籍ではあり、又凡そ山岳圖書のエッセンスを集め盡したと稱してもよいだけにこの二百餘冊の整理と陳列は忙しいが又愉快な仕事ではあつた。夕方五時から十一時過ぎまでかゝつて、やつと陳列は終つた。

陳列用のケースは上から覗く硝子ケースが五臺、大書棚二個、小書棚一個が用意された。

この中、小書棚が先づ会場入口に置かれて特に由緒深い文献を以て満

たされた、例へば「山岳」「日本アルプス」四巻「日本山嶽志」「高山深谷」或ひはウェストン師の「日本アルプス」マムの「アルバイン・クラブ・レヂスター」三巻、等々、硝子ケース五臺は會場の中央に配置されて、先づ最初の三臺は歐洲アルプスの文献で文字通り充滿した。

その中の一臺には特にモンブラン、マッターホルンに關する書が蒐められた。ウキンバーの著書は勿論、自署入りの「アルプス登攀記」が人々を餘らせたのみならず、ドウ・ソツユールの先驅者の偉著などもモンブランの文献として呈示された。

アルプスのケースはやはりアルプス黄金時代が幅をきかせて居る感じだ。又一方コンウエイ、クリリッヂフレツシュフィイルド等のその旺盛な著述力が改めて痛感されもした。

他の硝子ケースには、一つは和書一つは、遺稿、書翰等が収められた遺稿は、辻村、板倉、大島の諸氏のもの、書翰は小島さん御秘藏のウキンバー、チンダル、フオーブス、ラボツク等々のものが出陳された。

筆蹟を見るといふことは本を見るのとは別な人間的な興味が加はるもので、來會者の興味を特に引きつけた大島氏の「秩父雜感」のノートに熱心に見入る人達や、書翰を筆記して居る學生の姿など度々見た。又このケースで驚かされたのはあのジェネラル・ブルースのクル、ラホール紀行の際の手記が出陳されたことだ。

これは氏が瑞西ガイドのフリーラーに與へたものをアルバータ遠征で彼と

山岳圖書展覽會目録

山岳圖書展覽會の爲めに作製した目録の殘部が若干残つて居ります。右目録は「山岳」第一號附録として再録される筈でありますけれども、別冊は又それとして保存に値すると思はれますし、又實際に使用されるのには或は獨立の一冊である方が便利かとも思はれます。勿論展覽會の目録でありますから出品の品々に關する解説ではありますすが可成り充分内外重要文献を網羅し居り、且つは何れも内容解説發行所、發行所、判等夫々の要目が記載されて居ます。従つて單なる出品物の解説といふよりも一つの山岳圖書解題として役立つものも考へます、依而右の次第廣告致します。

目録内容

解説内容内譯

和書 三十三點
洋書 百八十二點
地圖 三十四點
寫眞圖版 二葉

菊 判 五十六頁
定價 並製金五十錢也(送料) 上製金壹圓也(四錢)
申込所 本會事務所

行を共にした三川氏が譲受けたといふ珍しいもの。このヒマラヤの主の

筆蹟を始めて見ることは感慨深いことであつた。

和書のケースにはさすがに古紙の香りが漂つて居た。稀觀書を主として集めただけ目録に掲載されたやうな珍しいものが揃つた。

ヒマラヤの文献は会場突當りの大書棚一個を埋め盡した。現在最も、關心を深く持たれる地方だけに、この書棚の前に立つ人の数は多かつたシュラーギントワイト兄弟の大著から、新しい處では、スマイス、パウエルまでが肩を並べ、例のアルプス公「カラコラム遠征記」の豪華版、フレツシュフィイルドの「ラウインド・カンチエンジャンガ」のバイオニア・ウオーク、が一段と光つて見えた。ウオークマン夫妻の探検記も五冊額を見せ、この夫妻の並々ならぬ努力を示して居た。

四回に渡るエグゼレスト遠征報告の四冊が輝いて居たことは云ふ迄もないだらう。

次に大書棚には、特にウェストン師の寫眞を、その三冊の著書と共に飾つて、面影を偲び、他に日本關係のもの數冊を配した他は、アフリカ南北アメリカ、コーカサス、スピッツベルゲン等の文献で満たされた。

アフリカのルーウエンゾリ、キリマジンジャロの登攀記録を主とする文献は、アフリカ文献の蒐集家徳川武定子爵の好意によつて殆ど代表的なものを網羅することを得た。マイヤールの「キリマジンジャロ誌」アブルヂ公

の「ルーウエンゾリ」ジョンストンの「キリマジンジャロ」等々は日頃あまり見ることの出来ぬものだけに、大きな喜びであつた。

最後のケースには、アルバイン・ジャーナルが並び、その他、登山技術、文學、美術傳記に關する書、外國山岳會の刊行雜誌等が並んだ。ヤングやフレツシュフィイルドの詩集ケムブリッヂ大學の屋上登攀案内、等々、獨特の風格を持つものが集つて捨て難い趣きを出して居た。

これ等ケースの外、壁面には古地圖が賑やかに飾られ、中央にはシュラーギントワイト作エグゼレスト峰の着色版畫の大額が掲げられた。

展覽會はこの内容を持つて、會期五日間に大略一千人以上の來場者にまみえた。勿論その中には漸く古地圖に現在と異つた諸地方の姿を眺めて興じて行くだけの無邪氣なストレンジヤースもあつたけれど、數度會場を往來してはケースを覗き込み、目録と對照し、又はノートする熱心家を迎へることも多かつた。

その度にこれだけの本を包含する常設山岳圖書館が欲しいものだと思はれもした。

近藤茂吉氏は記念晩餐會の席上でこの展覽會を見て、曾ての震災で焼けて去つた、會所藏の圖書の姿に再會して感激を新にしたと語られた。

この展覽會は本當に色々な意味で山岳人の心の中に何物かを残したと云へるだらう。

極地登攀の勸誘

トリエスト在住山岳家ボルリツツ
アー氏 (Andrea de Politzer-Pol-
nghi Via Cavana N. 15 Trieste)
氏から、小池新二氏 (市外小金井村
貫井、好日莊) 宛に大要左の如く勸
誘があり小池氏から右勸誘を本會に
廻附して來ました。

予は今夏極地々方で登攀を試み
うと計畫中であるが、一人乃至二人
同行者を求めつゝある。ヨーロッパ
の登山家達は時間の不足が資金の不
足で自分と行を共にすることが出来
ない。其處で自分は若しや貴下を通
じて日本から同志と求めることが出
來やすいかと考へた次第である。

現在同行を約して居るものはノ
ルウェイ人の山岳家一人及びオース
トリアの地理學者一人で此の二人に
對する約束から自分は我々が極地々
方の何の山を試みやうと計畫して居
るかは今日謂ふ譯に行かない。然し
目的とする初登攀が極地登攀中で最
も興味もあり、學問的意義の深いも
のであること、然もその割合には簡
單で且つ費用が要らないものである
ことは確定出来る。

出發は六月一日で、八月末歸途、
費用は八十磅乃至百二十磅。

小池氏宛の書翰には詳細な携帶品
目録が附けてあり、計畫が突飛なも
のでないことは察せられる。

然し資金と時とに不足を考じて居
る者は歐洲登山家ばかりではなく、

若し我々に此の二つのものが、あれ
ば極地よりも他に行き度い所が多い
こと、且つは又、かゝる計畫に未知
の人間が参加することが大いに考慮
を要すること (相當な額を揃へたデ
イレントフルトのカンチエンジャン
ガ試登の経験に鑑みて) 等からし
て、小池氏の御好意にも拘らず本會
では何等積極的態度をとることを差
控へる旨五月定例理事會で決定しま
した。

然し右は會員中に特志の方があつ
た場合その参加を妨げるものではな
く (事實上時間的に不可能でありま
すが) 折角の勸誘でもあり、小池氏
が本會へ右の手紙を廻附して下さつ
た御好意に酬むる意味からしても、
ボルリツツアー氏の手紙を要約し會
報紙上に發表する次第であります。

(松方)

會員通信

拜啓する四月廿六日 白峰、農島
岳東面より生ずる荒川本谷へ落込む
急峻のアスナロ澤より農島岳頂に
參りました。

甲府の峽西岸安登山口より夜叉神
峠を越へて荒川溪谷を溯行して廣河
原に野營しました、降雨あり。

廿六日 あまり良くない天候だが
出發しました。アスナロ澤は歩一歩
毎に高度を感じさせます。先年同志
社の兒島・山本兩氏の登高した右折
の澤より農島岳の肩に取付き頂上を

極めました。時間は次の通りです。

廿六日 晴後一時雪 廣河原 (五
・五五) — 細澤 (六・一五) — 五軒
小舎 (荒川本谷とアスナロ澤の出合)
(七・三〇) — 農島岳 (二・〇〇) —
西農島岳 (二・三〇) — 降雪あり
— 五軒小舎 (二・三〇) — 細澤 (三
・五〇) — 雪止む — 廣河原 (四・二
〇) 翌日歸りました。

澤の登高は非常に樂でしたが、尾
根取付でラツセルに困難でした。

農島岳の肩より甲州側に大きな雪
庇を形成して居ります。アスナロ澤
の兩岸は急で雪崩の危険を充分示し
てゐますから新雪の多い時には入れ
ません、急傾斜面の雪は次から次へ
と大部分雪崩崩落するやうです。

(早川安治)

陸地測量部新版地圖目錄

二萬五千分一地形圖修正	松本近傍	四號	諏訪	一面
同	五號	池田	一面	
同	十號	北小野	一面	
五萬分一地形圖修正	鳥取	四號	出石	一面
同	七號	香住	一面	
同	六號	犬飼	一面	
大分	七號	三重町	一面	
同	十五號	阿蘇山	一面	
同	十六號	高森	一面	
同	五號	延岡	一面	
同	八號	高鍋	一面	
同	九號	諸塚山	一面	
同	十二號	妻	一面	

山日記發行

一九三五年版「山日記」は五月下
旬發行の運びに至りました。今年は
第六回目の發行であります。

山小屋山案内登山團體は全部再調
査をなし、内容の充實更新を計り、
登山衛生、登山日程表は全部稿を改
め、其他の項に於てもそれ〴〵補修
の手を加へました。

今年度の重なる内容と目次は左の
通りであります。

登山の注意 (松方三郎)

冬期登山 (同)

服装、用具、食料

登山用品表

登山用具目錄

應急手當及び登山衛生 (新稿片山)

本邦主要山岳高度表 (木暮理太郎)

同 峠高度表 (角田吉夫)

外國の高山百座 (木暮理太郎)

同 峠高度表 (同)

山小屋 (再調査)

山案内 (再調査)

帝室林野局管林署所在地

日程表 (新稿、藤島敏男、後藤幹次)

冠松次郎、角田吉夫)

日程表附圖概念圖 (一部追加、北ア
ルプス二、中央アルプス一、南ア

ルプス二、秩父、上越國境嶺山本
尾瀬奥利根方面)
全國登山團體一覽 (再調査)
世界主要山岳會一覽 (新稿)
山岳寫眞要項 (補修 頼田敏)
地圖使用上の注意 (園部部)
十種雲級表
星圖

地名解讀
郵便規定
日本山岳會々則
寒暖計比較表
度量衡
(以上本文二四六頁、寫眞一葉)

曆・日記欄・登山經歷欄・自由日記
欄・住所欄 (以上二四四頁) 定價一圓

山日記會員割引に就て

一九三五年版「山日記」は五月廿
五日頃發行の豫定であります。例年
の如く會員に對し二割引を以て御領
ちする事になり、豫約申込を募りま
す。

- 1 一冊八〇錢 (定價一圓)
- 2 送料一冊四錢
- 3 申込は本會事務所宛のこと
- 4 送金は申込と同時に
- 5 申込部数は制限なし

以上



會務報告

役員總會並三月定例
理事會

三月十四日午後六時半於本會事務所、出席、高頭、木暮、小島、藤島松方、黒田、額田、飯塚、逸見、櫻井、田口、磯野（以下委任）武田、高野、山川、近藤、冠、中村、木村三枝、島山、別宮、福島。

役員總會

一、會則（第九條 評議員推薦ニ關スル條項）變更ノ件、條文立案ノ上改メテ議スルコト

一、創立三十週年記念事業トシテ

山岳圖書展覽會（五月開催）

卅週年記念有志晚餐會（五月開催）

關西ニ於ケル講演會（十月開催ノ豫定）

記念出版物版行ノ件（可決）

理事會

一、山岳編輯ノ件、二月十六日開催

ノ編輯委員會ヲ報告

一、山日記編輯ノ件

四月定例理事會

四月十一日、午後六時、於虎之門

曉翠軒。出席、高野、高頭、小島、松方、島山、藤島、磯野、森田、額田、福島、逸見、三田、飯塚、黒田冠、田口。

一、會則第九條立案ノ件

一、山岳編輯ニ關スル件

一、山岳圖書展覽會ノ件

ついでに渡佛する評議員藤島敏男氏の送別會を開催す。

五月定例理事會

五月九日午後六時半於事務所

出席、高頭、木暮、島山、飯塚、逸見、森田、田口、松方（以下委任）

小島、黒田、三田

一、新入會員詮衡

一、「山岳」第卅年第一號編輯報告

松方

一、全則第九條改正案ノ件

一、第六十七回小集會開催ノ件

一、山岳圖書展覽會に關する、事務並に會計報告（別項参照）松方

一、「山日記」編輯報告 松方

一、ボリツア氏極地登山參加勸誘に關する件（別項参照）松方

代表者變更

東京市本郷區彌生町 第一高等學校

旅行部 代表者 北岡 馨

新着圖書

伊藤秀五郎著 北の山 梓書房

登歩溪流 第九 東京登歩溪流會

寫眞月報 五月號 小西六本店

山 同 梓書房

野鳥 同 朋文堂

山小屋 同 同

ケルン 同 同

登山とスキー 同 黎明社

ツリースト 同 同

ジャパン・ツリースト・ビュロー

霧の旅 四、五月號 霧の旅會

宇野源三郎著 芦屋川の兩岸

大阪竹見社

山嶺 四、五月號 東京野歩路會

みなかみ 一月—五月號 奈良山岳會

泉ヶ嶽 第一號 七七銀行山の會

アケボノ 同 桐生曉山岳會

旅 四月號 東京曉山岳會

管見錄 同 大阪管見社

行雲會報 同 小倉山岳會

こくら 同 大阪三品山岳クラブ

山梨 同 東京山旅クラブ

獨立樹 同 高嶺朝紅會

朝紅 同 同

京都山岳會報 同 同

尾ゼの會報 同 東京山彦山岳會

山彦 五月號 關西徒歩會

ベデスツリヤン 同 東京旅行クラブ

旅行 同 關東岳愛會

獎健ワンダーフォーゲル東京獎健會

黒木立 同 横濱山岳會

山 同 日本アルカウ會

アルカウ趣味 同 東京アルカウ會

旅 同 關東旅行クラブ

旅路 同 五月號

かがりび山岳會報 同 同

がくれい會報 同 同

東京市山岳部報 同 同

廣島山岳會報 同 同

明峯山岳會報 同 同

山人會月報 同 同

日本登高會報 同 同

武藏山岳會報 同 同

東京登歩溪流會報 同 同

臺灣山岳會報 同 同

名古屋山岳會報 同 同

Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen Alpen-Vereins

nes 1934

The Geographical Journal March 1935.

Natural History Mar. 1935.

Trail and Timberline Mar. 1935.

Appalachia Mar. 1935.

The Prairie Club Bulletin Mar. 1935.

The Mountaineer Mar./Apr. 1935

Die Alpen Feb./Mar. 1935.

Unione Ligue Escursionisti Gen./Feb. 1935.

Plainski vestnik Stev. 2/3 Leto 1935.

Club Alpino Italiano Gen./Feb. 1935.

La Montagne Feb. 1935.

Svenska Turistforeningens Tidning 1 1935.

Sierra Club (Mexico) Oct. 1934.

The Journal of the Mountain Club of South Africa Vol. 37 1934.

Butletti del Centre Excursionista be Catalunya Gener 1935.

Revue Alpine C. A. F. 1st Trim. 1935.

昭和十年五月二十五日印刷

昭和十年五月二十八日發行

發行所 額田 敏雄

編輯兼印刷者 逸見 眞雄

東京市芝區琴平町一

（不二ビル）

日本山岳會

電話 二六四九番

廣告 一手取扱

電話 四六五四番

登山關係自動車便調査 (I)

一九三〇年以來本會に於ては全國の山小屋、山案内の調査といふ事に對しては少なからぬ努力と犠牲を拂つて來てゐる。その結果が毎年五月發行される山日記に依つて發表されて來た。山小屋、山案内の調査と共に、山麓地方に於ける交通機關の調査、即ち自動車、特殊軌道、馬、馬轎等の調査を頭初より計畫されてゐたのであるが、今日まで實行の運びにまで到らなかつた事は遺憾であつた。それがやうやく本年に至つてこの計畫が實現され、茲に發表の出来るまでに資料の蒐集されたるを係の者はよろこんでゐる次第である。

今回のこの自動車便其他山麓地方の交通網の調査は全國の山小屋、山案内の調査と共に主として山小屋所有者及び山案内組合代表者に向つて問合せ書を發送した。かゝる調査は各登山口の下車驛に向つて問合せをなす可きが順序であるが、むしろ逆に、その終點地である山麓を調査の對照としてゐる。それには定期の乗合自動車以外の貸切自動車の入り得る限度を調べるに好都合であらうと考へた爲である。又それだけに不備の點も少くない。

日本山岳會としては、この調査は初めての試みである。因つて以下に記載する處には萬全を期するには甚だ遠いものである。然し各地より寄

せられたる報告書を圖書室の一隅に積込んで置くだけでは、今後數ヶ年の調査をつづけたとしても、到底完全なるものは出來ない。むしろ會報に發表し、會員諸氏の御援助を得て初めて、立派なるものが出來上る事と考へる次第である。

調査票の内容は左の如し

登山關係自動車便調査票(特殊軌道、馬、馬轎等を含む)

- 1 目的とする山岳名
 - 2 自動車區間
 - 3 距離
 - 4 料金(定期乗合、貸切、特別規定の別)
 - 5 始發終發の時間
 - 6 一日の發車回数
 - 7 開通期間
 - 8 經營會社名及住所
 - 9 回答者氏名及住所
- (以上昭和十年三月發送)

北海道地方

大雪山方面

上川驛—層雲峽 二四軒 定期乗合
一圓 鐵道連帶二割引 貸切七圓
東川—忠別 一六軒 定期乗合八〇錢 貸切五圓—八圓 四月下旬より降雪期 尙別忠松ノ山温泉間—二軒本年秋開通豫定

十勝岳

上富良野驛—吹上温泉 一八軒 一圓 貸切五圓 一日三回 驛發A・M七、三〇 P・M五、〇〇
温泉發A・M九、〇〇—P・M六、〇〇 五月下旬—十月下旬 冬期馬轎 一圓 一臺三名三圓 一臺一名二圓
ベアシリ岳及九度山(天鹽國名寄)
名寄—下川 一八軒 四〇錢 一日五回 A・M五、〇〇—P・M七、〇〇 五月一日—十一月末
名寄—美深 二〇軒 五〇錢 發着時間及期間右に同じ

武利岳・武藝岳

留邊蘂—温根湯 一二軒 定期五〇錢 回数數汽車發着の都度
温根湯—富士見 二二軒 貸切六圓五〇錢 尙森林鐵道は五月中旬より十月末
日高方面

芽室驛—上美生四月—十月詳細不明
帶廣驛—尾田村 詳細不明

東北地方

八甲田山

青森驛—前岳 二二軒 一圓 三月末—十二月末 馬車幸畑を経て元湯に通ず

駒ヶ岳

生保内驛—水澤温泉 一〇軒 一圓 五〇錢 一日六回 前七、四五—後七、一四 五月—十二月 貸切二圓五〇錢
鳥海山

遊佐驛—藤岡杉澤村駒止 一〇軒 貸切 料金不明

遊佐驛—觀音寺 四五錢

象潟驛—小瀧口 五・五軒 五〇錢 貸切二圓五〇錢

小瀧口—馬止 乘馬 一頭五〇錢

月山
間澤—本尊寺村志津 二二軒 一圓 一〇錢 本道寺迄四〇錢 日山澤 八〇錢 貸切五圓 前七、三五—後五、五〇 志津迄一日六回 五月—十一月

間澤—岩根澤 八軒 三〇錢 一日六回 前六、〇〇—後九、〇〇

手向—狩川 一〇軒 四〇錢 一日二回 狩川發前一、〇〇—後四、〇〇

手向—鶴岡 一四軒 四〇錢 一時間每發車 前七、〇〇—後六、〇〇 〇 四月—十月 貸切二圓五〇錢

鶴岡—名川 一六軒 四五錢
田麥俣—鶴岡 七月十五日—九月十月 十臺駐車 特別運轉

新庄—肘折 二八軒 一圓 二回—四回 四月—十一月 右同

古田—肘折 二八軒 一圓 右同

船形山
東根—高崎 八軒 三〇錢

泉ヶ岳
仙臺市—根白石村 一二軒 五〇錢 前八、〇〇—後六、〇〇 四回

鑪石岳
十文字驛—岩井川 一八軒 八五錢 五回 四月—十一月 貸切四圓

水澤町—若柳村役場 八軒 三〇錢

五回

須川岳

一ノ關町—瑞山 二〇軒 一圓二〇錢 四回 貸切五圓 道惡き時刻増あり

瑞山—須川温泉 一八軒 乘馬 三圓

藏王山

大河原驛—遠刈田温泉 七〇錢 九回 前六、一五—後五、〇〇
大河原—青根温泉 二八軒 一圓 貸切五圓 降雪多き時休止 時間右同

山形—高湯 一八軒 乗合上り九〇錢 下り八〇錢 往復一圓五〇錢 一日四回 貸切五圓 團體二割引 五月—十二月、但し十二月—五月 山神迄

朝日岳

左澤—夏草 七〇錢 三回 二月—十二月
左澤—貫見 一三・二軒 八〇錢
小國—尻無澤 八軒 二回
小國—機山 一六軒 貸切あり

鶴岡—落合 一三軒 三〇錢 貸切二圓五〇錢

飯豊山

山都驛—一ノ木 一二軒 四〇錢 四回 八月中割引あり 貸切二圓 冬期休止

德澤驛—梅入 一二軒 三〇錢 四回 四月—十一月 貸切一圓五〇錢

新發田—赤谷 二〇軒 四〇錢 五回 四月十日—十月末日 貸切一

圓

羽前沼澤驛—小國本村玉川 一四軒

八〇錢 二回

日出谷驛—實川 馬車軌道 一〇軒

料金荷物に依り相談す

小松驛—玉庭 一二軒 三〇錢 四回

五月—十二月 貸切二圓五〇

吾妻山

米澤驛—白布高湯 一圓 二回

關東北部、上信越方面

那須岳

黑磯驛—那須溫泉 一六軒 一圓

九回 貸切五圓 團體割引あり

尾瀬沼

沼田驛—片品村古仲 三四軒 一圓

一〇錢 往復二圓 夏十二回冬四回

貸切鎌田五圓五〇錢 古仲七圓

武蔵山、利根入り

沼田驛—川場溫泉 九・八軒 往復

一圓 夏四回冬三回 貸切二圓

川場終發夏後五、〇〇冬後四、三〇

水上驛—藤原横山 一二軒 貸切二圓

四五〇錢—三圓 積雪期四圓内外

谷川岳

湯檜曾驛—土合 三・五軒 貸切一圓二〇錢

五月—十一月

水上驛—谷川溫泉 三軒 三〇錢 往復五〇錢

三月中旬—降雪期

苗場山

越後湯澤驛—三俣村八木澤 七軒

三〇錢 四回 六月—十二月初旬

越後湯澤驛—貝掛溫泉 一四軒 四

五錢 四回 四月下旬—十二月初旬

貸切一圓五〇錢 一圓五〇錢ノ割

越後湯澤驛—二居 貸切四圓五〇錢

同驛—淺貝 貸切六圓

卷機山—清水峠

六日町驛—上長崎 一〇軒 三〇錢

六回 四月下旬—十二月

六日町驛—八鹽澤驛—清水 貸切二圓—三圓

八海山・駒ヶ岳・鏡山平

小出驛—大湯溫泉栃尾又溫泉 一二軒

六五錢 六回 六月—十月

貸切三圓五〇錢 夜間四圓一〇錢

五日町驛—大崎 五軒 一五錢 六回

五月—十二月 貸切更に一軒

里宮迄 一圓

五日町驛—城內村山口 八軒 五月

十一月 貸切二圓

六日町驛—城內村山口 一〇軒 貸切三圓

淺間山

草津—峯ノ茶屋 二八軒 一圓五〇錢

六回 五月初—降雪期 貸切六圓—七圓

六回 七月

香掛驛—峯ノ茶屋 七軒 五〇錢

四回 六月—十月末 貸切三圓—七圓

志賀高原

須坂驛—山田溫泉 一二軒 六〇錢

往復一圓 十回 通年 貸切三圓

湯田中驛—上林 二軒 二五錢 十回

通年 貸切八〇錢

秩父方面

奧武藏

豐岡町驛—奥多摩御岡 二六軒 五〇錢

貸切二圓

飯能—名郷 二四軒 七〇錢 往復

一圓二〇錢 貸切三圓五〇錢

吾野驛—大藏平 五〇錢 十三回

秩父方面

奧武藏

豐岡町驛—奥多摩御岡 二六軒 五〇錢

貸切二圓

飯能—名郷 二四軒 七〇錢 往復

一圓二〇錢 貸切三圓五〇錢

吾野驛—大藏平 五〇錢 十三回

貸切二圓五〇錢 夜間一割増

大菩薩附近

鹽山驛—雲峯寺 七・五軒 往五五

錢 復三五錢 十四回 五月—十一月末 前四、一五—後八、五五

貸切二圓五〇錢

猿橋驛—七保村田無 四軒 二〇錢

貸切一圓 夜間五割増

鹽山驛—諏訪村窪平 四軒 一五錢

前五、〇〇—後一〇、〇〇 貸切一圓二〇錢

金峯山

龍崎驛—八巻 二六軒 五五錢 四回

小海北線信濃川上驛—梓山 一五軒

四五錢 四回 前九、〇〇—後六〇〇 貸切三圓

三峯山、板本

三峯驛—大輪 五軒 三〇錢 往復

五十錢 十四回 貸切一圓五〇錢

三峯驛—落合 五〇錢 四回 貸切二圓五〇錢

八ヶ岳・霧ヶ峯

茅野驛—濃溫泉 二一軒 一圓三五

錢 往復二圓 二回 貸切五圓

茅野驛—濃溫泉 二一軒 一圓三五

錢 往復二圓 二回 貸切五圓

茅野驛—濃溫泉 二一軒 一圓三五

錢 往復二圓 二回 貸切五圓

茅野驛—濃溫泉 二一軒 一圓三五

錢 往復二圓 二回 貸切五圓

茅野驛—濃溫泉 二一軒 一圓三五

茅野驛—泉野 七軒 四〇錢 七回

泉野發前五、二五—後七、二六

貸切一圓二〇錢

霧ヶ峯

上諏訪驛—霧ヶ峯(清水橋) 九軒

省營バス 二七錢 十二月廿八日

三月廿五日 貸切三圓

下諏訪驛—和田峠—九子町 省營バス

諏訪線 上和田八七錢 長久保

一圓一錢 九子町—一圓四一錢

五回 四月一日—十月三十一日

下諏訪驛—和田峠 貸切 三圓—三圓五〇錢

頸城山塊

戸隠山

長野驛—戸隠神社前 二〇軒 一圓

往復一圓八〇錢 夏九回 十二月

五月迄四回 長野發前六、〇〇

後五、三〇 戸隠發前六、〇〇

後五、〇〇

柏原驛—戸隠神社 二〇軒 貸切七圓

往復一二圓

笹ヶ峯—乙見山峠

田口驛—杉野澤村 六軒 貸切二圓五〇錢

杉ノ驛—笹ヶ峯牧場 乘馬 一〇軒

一圓 四月十五日—十一月廿日

中土驛—眞木(小谷溫泉) 六軒 四〇錢

六回 四月—十一月

妙高山

關山驛—關溫泉 七軒 上り六〇錢

下り四〇錢 貸切二圓五〇錢 十回

五月—十一月

田口驛—池ノ平溫泉 三軒 三五錢

貸切一圓八〇錢

田口驛—赤倉溫泉 五軒 五錢

貸切二圓五〇錢

(追補)

上越境三國峠

後閑驛—法師溫泉 二〇軒 乘合一圓二五錢

貸切六圓—四圓 一日

七回 午前八時—午後七時 十二

月—三月貸切利用のこと

赤城山

前橋—新坂下 二二軒 乘合一圓往復

一圓八〇錢 貸切四圓五〇錢

一日十二回 午前七時—午後六時

冬期は前橋箕輪間運轉

中央沿線

丹澤山

與瀬驛—三ヶ木—青野原 乘合七五

錢 貸切三圓 與瀬三ヶ木間一日

七回 午前七時四十五分—午後六時

十五分

景信山

與瀬驛—府深入口 一軒 乘合十五

錢 貸切五〇錢 一日五回 午前

六時五十分—午後六時十五分

陣馬山

與瀬驛—上澤井 八軒 乘合四五錢

貸切一圓五〇錢 一日四回 午前

六時五十分 午後六時十五分 降

雪多量の場合休止

陣馬山・三國山

上野原驛—上野原町 乘合十錢 貸切五〇錢

一日十一回 午前七時三十分午後九時三十八分